

婚約者は聖女を愛している。

……と、思っていたが何か違うようです。

セラティーナ・プラティース

芯が強く、一度決めたことに対しては最後までやり通そうとする。
婚約者と聖女様のため、
身を引いて家を出ようという決意。
恋愛においても一途で、
前世の夫に心を惹かれている。

フレス・カエルウム

長寿な妖精族のひとりで気まぐれな性格。
基本的には人間には関心がなく、
非干渉の立場だが、
セラティーナには特別優しい。

ナディア

セラティーナの侍女。
適度な距離感を
保ち、仕える。

シュヴァルツ・グリージョ

セラティーナの婚約者だが、
彼女を顧みようとしない。
冷静な性格で聖女である
ルチアと幼馴染。

ルチア・ルナリア

王国に現れた待望の聖女。
シュヴァルツを愛している。
セラティーナに対し、
少々無礼な態度が目立つ。

エルサ・プラティース

セラティーナの妹。
本当は姉と仲良くしたいが、
両親の前ではそれもできず、
ひとりで煩悶する。

プロローグ 壁の花

今日は王城の豪華絢爛な舞踏会場で王太子殿下の誕生日パーティーが開かれている。

私は壁の花になって中央で踊っている絶世の美貌を持つ男女を眺めていた。

私の名はセラティーナ・プラティーナ。

プラティーナ家の特徴でもある、腰までの少々癖のあるプラチナブロンドと青い瞳を持つ、――
王国一の財力を持つプラティーナ公爵家の娘。

中央で踊っている男は私の婚約者シュヴァルツ・グリージョだ。灰色の髪と同じ色の瞳を持つ美しい公爵家令息。そして、彼が熱の籠もった瞳で見つめる相手はルチア・ルナリア伯爵令嬢。

二人は幼馴染だった。

だがルチア様は久しぶりに現れた聖女で、シュヴァルツ様は私の婚約者。

シュヴァルツ様と婚約した私は、両想いの二人の仲を引き裂く悪女だと社交界で囁かれている。

今でもそう。ファーストダンスが終わったらすぐにシュヴァルツ様はルチア様の許へ急ぎ、いつも置いて行かれるので、周囲にいるほかの貴族に嘲笑われていた。

ふう、と息を吐き給仕から貰ったワインを飲む。



味は良いのに周囲のせいで台なしだ、と再度溜め息を吐くと「華やかな場に辛気臭い方がいらっしやるわね」と数人の令嬢を引き連れ、宝石のついたリボンで金の髪をハーフアップに結った令嬢がやって来た。

私の妹エルサだ。

「そんな陰気な性格だから、グリージョ様もお姉様が嫌なのですよ」

後ろの令嬢達がエルサの言葉に次々に同意する中、私はあることに気づいた。けれどここで言うべきかと悩む。何も言い返さない私に痺れを切らしたのか、エルサが「何か言ったらどうなのですか」と語気を強めた。

そこまで言うのなら、と私はグラスをテーブルに置いてエルサの前に立つ。

急に近くに来たせいでエルサは身構えたのか、ビクッと肩を揺らした。

私は両手を伸ばし、少し結びが緩んでいるエルサのリボンを結びなおした。

きょとんとするエルサに少し笑いかけて首を傾げる。

「リボンが緩んでいたわ。ダンスを踊った時に緩んでしまったのね」

「あ……ありがとうございます……」

私がそんな声かけをするなんて想定外だったのだろう、瞬きを繰り返すエルサは私の前から立ち去る気配がない。取り巻きの令嬢達も何とも言えない空気に困惑している。

私はエルサに「まだ何か用が？」と訊ねた。

「……な、何でもありませんわ」

「？」

エルサは何をしに来たのかしら。妹は急に不機嫌になって令嬢達を連れ、どこかへ行ってしまった。去り際、耳が赤かったが大丈夫だろうか。

私はまだ中央で踊り続ける婚約者と聖女の二人を一瞥し、気にせずスイーツを取りに行った。王太子殿下の誕生日を祝う場だけあって用意されているスイーツはとても豪華だ。私が好きなオペラもツヤツヤとした光沢を放ちながら並んでいる。王城が用意したオペラは絶対に美味しいだろう。期待して小皿に載せ、スィーツ用のフォークを手にして一口頂く。

予想通り格別に美味しい。毎日では飽きてしまうけど、月に一度は食べたい味ね。

周囲の視線は感じるけれど、誰も私に声をかけようとはしなかった。エルサみたいに堂々と私を馬鹿にしようとする人はほかにいない。エルサは妹だからできるのだろうが、昔から私の周りにはあまり人が寄って来ない。特に悪意を持つ人は。

——昔もそうだった。

急に外の空気を吸いたくなって、オペラの残りを素早く食べきってからテラスに出た。雲一つない夜空を見ていると思い出す。

——フェレス……

彼の、夜空に浮かぶ小さな星々のごとく光る銀色の髪も、瞳に月を宿す濃い青の瞳も。甘く聴覚を刺激する低い声も……全部まだ鮮やかに覚えている。

第一章 夫に愛された前世の記憶

私は前世というものを覚えていた。

前世は、長寿の種族と言われる妖精族の男、フェレスの妻だった。

妖精族の妻でありながら、私は前世も人間だった。

妖精族のフェレスに一目惚れだ、好きだと告白された時は大層驚いたものだ。

互いをよく知りもしないでフェレスを受け入れるなどということはできなかった。

二回断り、三回目の告白をされた時、彼がどんな人かを知って考えたいと告げ、私達の交際が始まった。

妖精族はとても気紛れな種族で、基本的には自分達の生活が脅かされなければ人間はどうでもいいと思っている。

人間が見目麗しい妖精族に惚れることはあっても、妖精族が自分達より遥かに寿命が短い人間に惚れることはほとんどなかった。

だから彼の告白に余計驚いた。

フェレスの気持ちを受け入れ、結婚し……前世の私が寿命を迎え、その生涯を閉じるまでフェレスは心から愛してくれた。

「フェレス……」

私が前世の記憶を持ったまま、新たな人生を迎えていると気付いた時は驚いた。前世を終えてから約五十年経過している。

けれど当時から三百歳を超えていたフェレスだ、たかが五十年、彼にとつたら短い期間だろう。——会いたい。フェレスに会いたい。

もしも、彼にほかに愛する人がいるなら邪魔はしない。

遠くから一目でもいい、フェレスが幸せでいるか見たい。

夜空を見上げながらそんなことを考える。

「さむっ」

少々外に長くすぎたようだ。

会場に戻ると中央で踊っていたシュヴァルツ様とルチャ様はいない。

ずっと踊っている訳ないか、と探そうとしたがその必要はなかった。

シュヴァルツ様はすぐに見つかった。ルチャ様の腰を抱いて至極大事そうにエスコートしている。私に対しては互いの隙間がなくなるほど、ピッタリくっ付いてエスコートしないのに。

周囲の人間は二人を見つめる私を目敏く見つけ、ここぞとばかりに嘲笑う。

だが、私にとってはどうでもいい。

あれなら、シュヴァルツ様は聖女のエスコートに忙しかつたので、自分は先に帰ったと言い訳できる。

さつさと帰りましょう。

小さく欠伸をしてから会場を出る。

嘲笑していた周囲の者達はギョツとした様子だった。

悔しそうに、悲しい顔をして出て行く私を期待していたのかしら。

外に出て馬車の所へ移動しようと進み始めた矢先、ふと思いついた。

形式上は婚約者のため、シュヴァルツ様が私を迎えに来てその馬車で王城に来た。

帰日も当然グリーンジョ家の馬車に乗る前提だ。私一人では乗れない。

困った……王太子殿下の誕生日パーティーが終わるのは夜中を超えるだろう。

シュヴァルツ様が私の存在を思い出すとは思えない。月に一度あるデートですらすっぱかされるのだから。いつだったか、待ち合わせの場所に行っても来る気配がなく、帰った経験すらある。その時も事前に報せの一つでも入れてくれていればいいものを……と呆れ果てた。

どうやって帰ろうか考えていると「お姉様」と呼ばれた。

振り向くと一人でエルサが腕を組んでいる。

「エルサ？ どうしたの？」

「どうしたもうこうしたも、グリーンジョ様に存在を忘れられて、一人惨めに帰ろうとしているお姉様を笑いに來たのですわ」

「そう。今の時期、夜空の下は寒いから早く会場に戻りなさい。貴女、昔はよく風邪を引いていたのだから」

エルサは今でこそ健康だが、幼少期はベッドの上で過ごす日々が多く、両親は病弱な妹を溺愛していた。元々両親は、厳格な祖母によく似た私より、母によく似たエルサを可愛がっていたから、病弱でなくても妹は愛されていたのだけれど。

私が視線を逸らすと、エルサは「わ、わたくし、疲れたから先に帰るとお父様とお母様に言ってきたので、わたくしも帰るところです」と慌てた様子で言ってきた。

「そう？ 気を付けてお帰りなさい」

「お、お姉様はどうやって帰るおつもりですか？ か、帰りの馬車なんてないのでしょうか？」

「そうなのよ」

困ったわと溜め息を吐く。

勝ち誇った笑みを見せたエルサが何かを言う前に、私は王城の外へと歩き出した。

「お、お姉様！」

また慌てた様子でエルサが声を掛けて来たので振り向く。

「どうしたの？」

「どこへ行くおつもりですか？」

「街に行つて帰りの馬車を拾うわ。貴女も早く帰りなさい」

「城から街までかなり距離がありますよ!？」

「ええ、そうね。でも、仕方ないわ。さすがに城から屋敷までとなると徒歩はきついから、街で馬車を――」

「お姉様が街まで歩いている姿を誰かに目撃されたら、我がプラティーン家の恥です！ すつつごく嫌ですが、同乗いたしましょう」

眉根に皺を寄せるエルサは言葉通りかなり嫌そうだが、どうして頬が赤いのだろう。

具合が悪いのかと心配になって首を傾げる。

私は前世の記憶を持つおかげで、普通の令嬢よりは争いごとへの対応力もあるし、攻撃魔法も扱える。何かあっても私なら一人でも無事でいられる。

それよりも早くエルサを屋敷へ帰そうと、一緒に馬車へ向かった。

プラティーン家の家紋がある馬車に着くと御者が私を見て目を丸くする。

「あれ？ セラティーン様は今夜グリーンジョ様の馬車で戻るのでは？」

「ちよつと事情が変わつたの。エルサを乗せて早く戻つて。具合が悪そうなの」

「お姉様も乗りますわよ！」

「わっ」

御者に扉を開けさせてエルサを乗せたら、彼女に腕を引っ張られ、中に引き込まれた。

御者は私も中に入ったのを見たのか、扉を閉めた。

仕方なくエルサの向かいに腰を下ろす。

「貴女、どうして私を？」

「さ、さっき言いました」

「大丈夫よ。今はまだ皆会場にいるだろうから。こんなに早く帰るのは私達くらいよ」

「貴族の娘が夜遅く一人で街を歩いて、無事で済むとお思いですか!？」

「私は魔法が得意だから、何かあっても一人で対処できるわ」

「そ、それは、まあ……お姉様はプラティーヌ家の者からすれば、魔法が得意な方ですけど……」

王国一の財力と個人が持つ魔力量を誇るプラティーヌ家だが、魔法の扱いが下手な者しかない。商売に関する才はあっても魔法に関してはイマイチなのだ。

私が魔法を使えるのは前世を覚えているからだろう。

私以外で魔法が得意な一族の者は今はほばいない。

魔法を上手く扱える私に劣等感を持っているのが父。母は自分に厳しかった義母の面影がある私を遠ざけ、さらに夫に同調して私を嫌うようになった。

両親との関係は絶望的だが、妹との関係も悪い……とは一概には言えない。

何かにつけて突っ掛かってくるが、完全に悪者にならないのがエルサ。

二人きりだとして冷静に会話が成立する。

「お姉様がグリーンジョ様と婚約したのは、お姉様の魔法の才能をグリーンジョ公爵が見初めたからですよね？」

「それと我が家の財力に目を付けたからよ」

「聖女様と婚約しなかったのは、そのためですか？」

「ちよつと違うわね」

「歴代の聖女は王族と婚姻を結ぶのが習わしよ。今の聖女様も例外じゃない。初めは王太子殿下と婚約が決まっていたの。ただ——」

王太子殿下と聖女の婚約が成立する前に、王太子殿下は大国である隣の帝国の第二皇女との婚約が決まった。帝国との縁が聖女よりも重要視された結果だ。

王子は王太子殿下の一人しかない。下には王女が二人いるが、聖女と婚姻を結べる王族がほかにいなかったのだ。この時点で聖女がシュヴァルツ様と婚約を結んでいたならよかったのだが……その時すでに私との婚約が成立していた。確か二年は経過していた。

プラティーヌ家の財力と私の魔法の才能欲しさに婚約が結ばれたので、グリーンジョ公爵は我が家との婚約解消をしなかった。

その頃からだ、社交界で私が両想いの二人を引き裂く悪女扱いをされ始めたのは。

「王太子殿下と帝国の第二皇女の婚約は何よりも優先されるべき政略結婚よ。両国の関係性を強く結びつけるためのものだもの。誰も異議なんて唱えないわ」

「ですが、今日、第二皇女はお見えにならなかったのですね」

「ええ。運悪く、帝国で流行っている感染症に罹られたみたい。でも、今朝の新聞に帝国に仕える魔法使いが特効薬を見つけたと載っていたから、じき回復するでしょう」

「し、新聞なんてお読みになられるのですか？」

「ええ、読むわよ」

自国の情報はもちろん、他国の情報もしっかりと把握しておきたい。

帝国について書かれた新聞を読みながらよく思い出すのは、フェレスと住んでいた帝国領の帝都から遠く離れた場所にある森の奥の住処だ。そこで二人ずっと暮らしていた。

かつてフェレスは私と会う百年前からそこに住んでいると語った。
きつと今も暮らしているだろう。

「グリーンジョ公爵は御子息と聖女様が両想いだとご存じでしたよね、それなのにお姉様と婚約させるなんて」

「さつき話した通り、元々、聖女様は王太子殿下と結婚するはずだったのよ。その慣習が反故にされても、私とシュヴァルツ様の婚約をなかったことにする理由にはならないわ」

本来ならグリーンジョ公爵から我が家に婚約破棄なり、解消なりを言い渡してもらいたい。

ずっと待っているのだが、一向にないのだ。

私と婚約しているせいで想い合うルチャ様と婚約できず、シュヴァルツ様からも嫌われている。

出会った当初から彼に嫌われているのは知っているが、王太子殿下と帝国の第二皇女との婚約が決まってから、より嫌悪の眼差しが強くなった。

――馬車がプラティーヌ家に到着し、御者が扉を開けた。

先に私が降り、エルサに手を差し出す。

振り払われるかと思ったが意外にも手を掴んでくれた。

「……ありがとうございます」

小さな声で紡がれたお礼の言葉。

いいのよ、と告げて私は先に邸内に入った。

部屋に戻り、息を吐いてソファアに座る。

今日の夜会や婚約について溜め息を吐いていると扉がノックされた。

応えを返すと「失礼します、セラティナ様」と専属召使のナディアが入ってくる。

「ナディア、湯浴みの準備をして」

「畏まりました。それと薬草茶をお持ちしました」

「ありがとうございます」

カートの載せたティーカップを受け取り、濃い緑色の飲み物に臆せず口を付けた。

この薬草茶は夜会やお茶会の後、必ず飲む。疲労回復の効果があるのだ。

「エルサ様も戻っているようですが、お二人で……？」

「ええ。私が一人で馬車を拾いに街へ向かおうとしたのだけれど、プラティーヌ家の恥になるからって馬車に乗せてくれたの」

「グリーンジョ様は……」

「聖女様に夢中だったから帰って来ちゃった」

「そう、ですか」

何とも言えない顔をするナディアに気にしないでと薄く笑い、湯浴みの準備を促す。

ナディアは私の飲み干したカップを受け取り、準備ができ次第、呼びに来ると言って退室する。

「シュヴァルツ様の気持ち、わからないでもないのよね……」

愛する人がいるのに、愛する人と一緒になれないシュヴァルツ様の気持ちはよくわかる。

前世の夫と一緒にねれない日々を過ごす、今の私の状況も同じだからだ。

夫に愛された前世の記憶があるおかげで、今の両親にもシュヴァルツ様にも愛情を求めずとも、まだ大丈夫。エルサは可愛い妹と思っているが、本人にどう思われているか不明だ。昔、正面から嫌いだと言われたので嫌われてはいる、はず。

考えている内にナディアが湯浴みの準備が完了したと呼びに来た。

今行くわ、と答えてソファアから立ち、浴室に向かった。

湯浴みを終え、部屋で冷たい紅茶を飲んでいると慌てた様子のナディアがやって来た。

「セラティーナ様、グリージョ様がお見えです」

「シュヴァルツ様が？」

私が彼に何も言わず帰宅したのに、今になって気付いたのだろうか。

私と妹が帰宅してもう二時間以上は経過している。

かなり焦った様子だったと告げられ、会わない訳にはいかない。

空のティーカップをナディアに渡して玄関ホールへと向かった。

扉の前にいるシュヴァルツ様は少々髪が乱れ、頬に汗の筋があつた。

私が顔を見せると「セラティーナッ！」と切羽詰まった声色で詰め寄る。

「なぜ先に帰った。それも私に一言もなくっ！」

「いえ……シュヴァルツ様はルチア様に付きっ切りだったので、私がいなくてもよいだろうと判断

しました」

「ルチアの側においてセラティーナを蔑ろにしたのは済まなかった。だが、無言で帰ることはないだろう」

「私がいようがいなからうが、シュヴァルツ様には大した問題ではないでしょうに。なぜ気にするのです」

「なっ、私は急にいなくなった婚約者を気にも留めない男だと思っているのか？」

「そうですね……」

ただ、私を好いているかと訊けば絶対に返答に困るのは間違いない。

何度かデートの約束を忘れたり、前もって約束していたエスコートを当日になって反故にしたり、と前科をお持ちだ。そう指摘すると気まずそうに目を逸らされた。

「そ、それは……」

「無言で帰宅したのは申し訳ありませんでした。シュヴァルツ様は私がいることを忘れていらつしやると思っていたので」

嫌味ではなく本心からの言葉だが、彼には嫌味に聞こえるだろう。

「私は安全に帰宅したのでシュヴァルツ様もお気になさらず。そういえば、ルチア様はどうされたのですか？」

「ルチアはルナリア伯爵に託した。心配ない」

——いえ、心配は特にしていません。

「そうですか。では、シュヴァルツ様もお気を付けてお帰りください」

「……ああ、そうする。セラティーナ、今度からは一言でもいい。私に声を掛けるように」
そう言つてシュヴァルツ様は歸つて行つた。

そういえば、どの時点で私がいけないと気付いたのか、聞くのを忘れていた。
気にするほどでもないかと一人頷き、私は私室に戻つた。

翌朝、普段通りナディアに起こされ、いつものように朝の身支度を整えた。

食堂に赴くとすでに両親とエルサがいて先に朝食を食べ始めている。

「おはようございます、お母様、お父様、エルサ」

礼を取り、家族に朝の挨拶を述べるが返事は来ない。

そんな家族の態度に慣れた私は自分の席に向かつた。

両親がエルサと和氣藹々^{あいあい}と話をしているが、私は無言で座について朝食に手を伸ばす。

こんがりと焼かれたベーコンをナイフとフォークを使って切っていると前方から鋭い声が飛んで来た。

「いたのか、セラティーナ。いつ来たのだ」

「あら。わたし達に挨拶もなしに食事をするなんて、本当に礼儀がなっていない子ね」

両親から早速嫌味を言われる。

「朝の挨拶はしました」

「お前の声が小さいせいでだろう。私達は一切聞いていないぞ」

ここで反論しても面倒なだけ。

再度、さっきの音量より二倍大きな声で朝の挨拶を述べた。

声が大きいと叱られるが、最初の挨拶は声が小さくて聞こえなかったと言われたので、声を大きくしたと反論する。これ以上言う両親、特に父を刺激するだけだ。

後は何も言わず、さっさと食事を進めた。

ナディアが私を心配そうに見るが、面倒になれば魔法を使って両親の意識を逸らせればいいだけ。

「まったく、昨日はシュヴァルツ様に断りもなく勝手に帰つたそうだな！ 慌てた様子で私達に聞きに来られたぞ」

「ルチア様と一緒にいらつしやるのを邪魔しては申し訳ないので」

「お前が至らないから、シュヴァルツ様はいつまで経つても聖女様を忘れられないのだ！ 少しは婚約者としての役目を果たせ」

十分に果たしているつもりだ……と言つても聞いてくれないので言わないでおく。

「申し訳ありません。以後、気を付けます」

「こんなことならエルサをシュヴァルツ様の婚約者にすればよかったわ」

「仕方ないだろう。グリーンジョ公爵が望んだのがセラティーナなんだ。魔法の才能があるだけが取り柄の娘を貰ってくれるんだ。ありがたいじゃないか」

母の言葉に父が首を振りながら頷く。

自分が、というより、プラティータ家に生まれる者に魔法の才能はほぼない。

稀に私のような者が生まれるが、それが羨ましいのだ、父は。

両親の小言を右から左に聞き流しながら、さつさと朝食を食べ終えて席を立ち、食堂を出た。そういえば、いつもなら両親と一緒にエルサも嫌味に加わるのに、今朝はなかったわね。

「どうせ、昼や夜に嫌味を言うでしょうけどね」

私室に戻りながら今日の予定を思い返すが、今日は何も無い。

となると、行きたい場所は……

私室に入り、一緒に戻ったナディアに振り向いた。

「一時間後、出掛けるわ」

「どちらへ？」

「街を散歩したいの。貴族御用達の店には行かないから、小さめの馬車を手配しておいて」

「はい、セラティータ様」

ナディアが部屋を出て行き、私はベッドの端に腰掛けて瞳を閉じた。

昨日のシュヴァルツ様とルチャ様を思い出す。

想い合っているのに婚約者がいるせいで結ばれない恋人達。

お互いを熱が籠もった瞳で見つめ合う二人を見ていると前世の夫が脳裏に浮かぶ。

かつての自分もあやうってフェレスとよく見つめ合った。

心の底からフェレスを愛しているから、愛する人と一緒に成れない苦しみは想像を絶するだろう

ということとは理解できる。

シュヴァルツ様を愛してもいなければ未練もないのだから、自分という頸木から解放してやりたい。

幸いにもプラティータ家にも未練はない。あるとしたらナディアくらいだが、彼女は優秀な召使だ。私がいなくなっても解雇はされないだろう。

元々、誰も両親に愛されていない私の世話をしながらなかった。給金の高さに惹かれて拳手したナディア以外は。

彼女もほかの使用人達と同じで私を雑に扱うのかと警戒したが、仕事はきちんとする人だった。

公私混同もしない。それがとても助かった。

「思い出してみるとシュヴァルツ様と婚約者らしいことってあまりしていないわね」

婚約者になってから月に一度デートをするが、場所は毎回街の噴水広場で待ち合わせてグリーンジョ家お抱えのカフェでスイーツを頂き、私が話題を振ってシュヴァルツ様が適度に相槌を打って終わるのが定番だ。たまに両家を行き来するが、お互い私室には通さない。

そこでも私が話題を振って会話は終了。シュヴァルツ様が自発的に話そうとすることはほとんどなかった。そう考えると昨夜の会話は長く話した部類に入る。

私は誕生日の時などに定期的に贈り物をするが、彼からはメッセージカードが来るだけ。誕生日の時くらい花束でも贈ってくれても良いと思うが、そこは頑なにメッセージカードのみ。それでも私から抗議を入れたことはない。

私という婚約者がいてもルチア様を優先するシュヴァルツ様だ、したところで嫌悪を露わにするだけだろう。シュヴァルツ様から贈り物の感想がないあたり、所詮その程度なのだ。メッセージカードは贈られるので貰う度お礼を言うが、彼には険しい表情をされるか、静かな怒りが込められた灰色の瞳で睨まれる。口を開くと言いたいのかもしれないが、黙ったままでは時間が無駄に過ぎていくだけ。

とりあえず、自分がいなくなっても困る人がいない事実にはショックを受けながらも、ある意味では後ろめたさを感じないのだから幸せだと思っておこう。

時間になると部屋にナディアが来て薄く化粧をし、髪を結ってくれる。帽子を被って部屋を出た。「あら、お姉様。どこかへお出掛け？」

廊下で出会ったのはエルサ。何だか機嫌が良さそうだ。

「ええ。エルサは？」

「わたくしはお母様と今から来る商人から宝石を買うの。お姉様は呼ばれてないから、来たって無駄よ」

「ええ。しばらく戻らないからゆっくり選びなさい」

「しばらくつてどこへ行くのですか……？」

「ちよつとね」

なぜか、エルサは不安げな面持ちをする。

そんな彼女に行き先を濁し、お姉様と呼ぶ声に背を向けて玄関ホールから外に出た。

手配した馬車にナディアと共に乗り込むと馬車は動き出した。

向かいに座ったナディアに「エルサは私を嫌っている割に、自分からたくさん話し掛けて来るのだけ……どうしてかしらね？」と訊ねてみた。

「えつと……おそらくセラティーナ様に構ってほしいのかと」

「正面から大嫌いって、昔言われたわよ？ 一応、私も気にして彼女に接触しないよう、注意を払っているのだけど」

「エルサ様は素直ではありませんから……」

素直ではない？ そうかしら。むしろとても素直だ。

公爵家の娘として思ったことをそのまま言葉にするのはいただけないが、包み隠さず私への敵意を表し、真正面からぶつけてくる妹が何だかとても可愛い。

悪意がないと言われると違うが、両親や私を馬鹿にする周囲と違って嫌悪の濃度が極端に薄い。

悪者ぶつても完全に悪になれない。エルサは根が良い子なのだ、元から。

馬車が街の広場に停車するとすぐさま降り、慌てて降りたナディアに微笑んだ。

「ナディアはオペラを買って来て」

「セラティーナ様は？」

「私は用事があるの。長引くかもしれないから、オペラを買ったら馬車で待っていて」

「いけません、私が代わりに」

「いいえ。私が行かないと駄目よ」

ナディアが言葉を続ける前に令嬢らしからぬ速度でその場を離れる。

おかげで目的地にはすぐに着いた。王国で最も大きな組合『グレーテル』。

確か、初代マスターの名前がグレーテルだからと聞いた。

そつと扉を引いて中に入り、カウンターにいる受付嬢に声を掛ける。

「あの」

「どうされました？ ご依頼は？」

「帝国の地理に詳しい方を紹介していただきたいのですが」

「帝国の？ 旅路の護衛者をお探して？」

「いえ。帝国に用があつて、王都から帝都まで定期便があるのは知っていますが、帝都の外となるとどう進んだらいいかわからないので……」

「でしたら、護衛の者を付けた方がよろしいのでは？」

受付嬢からすれば、見るからに裕福な娘が訳アリの空気を醸し出しているのだ、疑われて当然かもしれない。組合に入る前、身元がわからないように髪色を茶色に変え、顔も少し魔法で変えたのだが、仕方ない。鞆から多目のお金を出して受付嬢の前に置いた。

「代金はきちんと払います」

「そういう問題ではなく……」

困った。善意で言っているのは承知しているが、私からすると地理について教えてくれるだけでいい。

どうしようかお互いに困り果てていると「どうしたー？」と男性の声が飛んで来た。

「ランスさん」

坊主頭で額に斜め線の傷が入った大柄の男性が興味深げに会話に入った。

どこかで見たような……と既視感を覚えるも、受付嬢を納得させるのが先だ。

「この方が『帝国の外へ行くために帝国の地理に詳しい方を』と言われているのですが、護衛者をご希望ではないようで」

「そりゃあいけねえ。あんた、どんな事情があるか知らないが、一人で行くのは危険だ」

彼らは親切心からの忠告だと解しているものの、正直に事情を明かせないのが辛い。

「ところで帝都の外なんて、どこまで行くんだい？」

「えつと……帝都から北に二十キロほど離れた森へ行きたくて」

「確かそこは朝の妖精っていう、小さい妖精族が好む森だな。そこに何の用が？」

ここまで来たら話さないと納得してくれなさそうだ。

「その森に住む魔法使いに会いたくて……」

「それは……ひょっとしてフェレス・カエルレウムか？」

「ご存じなのですか？」

「ああ。知り合いでな」

フェレスに会いたいのは事実だ。ただ、帝国に行くだけのもっともらしい理由が必要だろう。

私は妖精族の魔力から作られる、妖精の粉が欲しいからだと告げた。彼はやって来る依頼人を大

抵受け入れると聞いて、どうしても会いに行きたいのだ、と。妖精の粉は主に魔力増幅の材料となり、また、非常に美しい代物で婚約者に贈りたいのだと理由を作った。

「妖精の粉を婚約者にか……立派だが、あんた変装魔法を使っているな？」

「ええ……」

「つてことは、貴族のお嬢さんか」

「お金はきちんと払います。だから、どうか紹介していただけないでしょうか」

「うーん。お嬢さん一人で、つていうのがネックだなあ……」

やはり、護衛者同伴でないと駄目だろうか。

腕を組んで悩むランスと呼ばれた男性に、私と受付嬢の視線が集中する。

「あ。でも確か」

「え」

「数日前だったか。フェレスから連絡が来たんだ。四日後に王都に来るって」

「王都に？」

「ああ。何でも王都にしかないものがあるらしくて、それを探しに来るんだと」

フェレスほどの魔法使いが欲するものが王都にある……？

かれこれ十八年は王都に住んでいるけれど、見当がつかない。

「王都に来たら顔を出すって言っていたから、あいつが来たらお嬢さんに連絡を入れよう」

「本当ですか？」

「その代わり、あんたの身分を証明してくれ」

「わかりました」

自ら会いに行こうと思っていた前世の夫が王都に来るのだ、その機会は逃せない。

ランスに言われ、私は変装魔法を解除した。

途端に変わる髪色や顔立ちに二人が息を呑む。

「こりゃあ驚いた……あんた、かなりの別嬪さんだな」

「ありがとうございます。私はセラティーナ・プラティーナと申します」

「俺はランスだ。プラティーナといえば、超大金持ちの公爵家だな。だがプラティーナ家は魔法が得意じゃない奴がほとんどだろう？」

「ええ。でも、私はたまたま魔法が得意な方みたいで」

「ええ。でも、私はたまたま魔法が得意な方みたいで」

「そうか」

「婚約者も魔法が得意な方なので、妖精の粉が欲しくて」

嘘ではないが、シュヴァルツ様のためではない。

ランスは受付嬢の方を向き、私の依頼は自分が受けると言い、受付嬢もそれを承諾した。

カウンターに置いてあるリストに何やら書き込みをしている。依頼は正式に受理されたようだ。

「フェレスが来たら、魔法で連絡を送ろう」

「ありがとうございます。助かります」

これでフェレスに会える手段が整った。

もしも、彼の側にほかに愛する女性がいたとしても一目で良い、彼に会いたい。
会ったら王国を去ろう。帝国に移住しても良い。

流れ者でも魔法使いなら重宝してくれるはずだ。

改めてランスと受付嬢にお礼を言い、組合を出た。

ナディアの待つ馬車に戻ろうと体の向きを変えようとした時、前に知っている人がいた気がした。
視線を其方へ向けて、あ、と思ったら向こうも私に気付いた。

鋭く冷たい灰色をした瞳が揺れ動く。彼は小さく瞼目した後、目を逸らした。

彼——シュヴァルツ様の側にはルチャ様がいる。腕を組んで恋人のようにデートをしていた。今日は何も約束をしていないから良いが、そうか、私との先約を反故にして毎回あやつてルチャ様とデートしているのか。

シュヴァルツ様に恋情を抱いていなくて良かったと心の底から安堵する。

——これも前世の記憶を持っているおかげね。

どうして前世の記憶を持っているかは謎だが、感謝する場面は幾度もある。

私は二人に軽く会釈をして、馬車の方へ歩を進めた。

馬車に着くと「セラティーナ様！」とオペラの購入を済ませたナディアが心配げに駆け寄ってきた。

「お待たせ。オペラは買えたようね。偉い、偉い」

「セラティーナ様はどちらへ行かれていたのですか」

「ちょっとね。危険な場所じゃないから安心して」

「ですが」

「大丈夫、誰の迷惑にもならないから。ナディアは心配性ね」

「ですが……はい、わかりました」

納得してくれてホッとする。

馬車に乗り込み、ナディアも腰を下ろしたのを確認後、御者に馬車を出すよう命じた。

屋敷に戻り、後でオペラと紅茶を持って来るようナディアに告げて、一人自室に足を向けた。

途中で商人から宝石を買ってもらったエルサと会った。首に光る首飾りはサファイアで、何も聞いているのに値段を告げられる。

私は興味がなく「似合っているわよ」とだけ言い、早々に部屋へ向かおうとするが——

「仕方ないのでお姉様の分も買ってあげましたわ。わたくしがお母様に言わなければ、お姉様の宝石はなかったのだから、感謝してくださいね」

「ああ、私はいらないわ。エルサが使って」

「いらない……？」

「ええ。私より、エルサの方が似合うわ。宝石なんてパーティーがある時しか、必要ないから」

「……わかりました」

高価な宝石好きエルサなら、譲れば嫌味を言いながら喜ぶと思っていたが、かなり落ち込んでいる。とぼとぼと去って行く背中が寂しそうだった。

エルサが好きではない宝石だったのかしら？　だとしたら申し訳ない。
エルサもいらなないとあればその内売り払うだろう。

今度こそ誰にも邪魔されなくて部屋に戻った。

エルササイド　姉とお揃いの宝石

「いらないうって言われるなんて……」

予想外だった。素直にお姉様のための宝石だと言えば良かった。

お姉様の宝石もサファイアで作られた首飾りだ。デザインは違うが同じ宝石の首飾りを姉と持つ、というささやかな願いはあっさり消費された。

沈んだ気分のまま部屋に戻り、ちよこんとソファアに座った。

「……今さら……仲良くなんてできる訳ないのに……」

自分でも取り返しのつかないほど関係が悪化していると自覚はある。そこから挽回するには、たくさんの努力と我慢が必要だとも。でも簡単にできない。できていれば苦労はしない。

仲良くなりたい。姉に素直に何でも言えるようになりたい。

最初は両親の影響を受けてわたくしはお姉様を嫌い、婚約者のグリージョ様に愛されない様を見て小馬鹿にしてきた。そうすれば両親はわたくしにだけ愛情を注ぎ、何でも願いを聞いてくれた。

お姉様という、プラティーヌ家の枠から外れた魔法の才能を持つ姉など不要だ……と信じていた自分は大馬鹿だ。

三年前、お姉様に助けてもらった時からとてつもなく後悔を抱いていた。どうやってお姉様に謝ればいいのか、声を掛けたいかと思えばかり考え、いざ実行に移そうとすると空回って逆効果となる。わたくしが何を言おうとお姉様は気に掛けず、淡々と対処をする。昨夜のようにわたくしについて気になる点があるとあやつて指摘したり助けたりしてくれる。お姉様にリボンの緩みを直された時はとても嬉しかった。それを口で、言葉で伝えられたらどれだけよかったか。

商人が並べた宝石を見ている最中、他人の前でよき親を演じたい母はお姉様を呼ぶよう使用人に命じた。確か出掛けると言っていたような……と思いついてみると、母は戻った使用人にお姉様の不在を聞いて激怒した。

『わたしは何も聞いてないわ！　お前！　もう一度見てきなさい！』

『で、ですがセラティーナお嬢様は本当にいらつしやらないんですつ。ナディアもないので街へ向かわれたのでは』

今は母を落ち着かせるのが先だとわたくしは間に入った。

『まあまあ、お母様。お姉様の宝石なんて適当でよいではないですか。与えられるだけ感謝してほしいですわ』

『そうね！　セラティーナには安物を与えましょう。あれに高級品は似合わない』

値段はどうであれ、同じサファイアで作った首飾りを選んだのは、お姉様とちよつとでもいいか

らお揃いを持ちたかったからだ。

呆気なく実現されなかった夢となって終わったが……



部屋に戻ると扉が乱暴に叩かれた。誰だと思い返事をすると勢いよく扉が開いた。現れたのは母、凄まじい形相である。

「セラティーナ！ 貴女どこへ行っていたの!?」

「街へ散歩に行っておりまして」

「せっかく貴女にも宝石を買ってあげようと呼んだのに、使用人に呼びに行かせたらいらないなんて！ 出掛けるなら前もって一声掛けるのがマナーでしょう！」

「申し訳ありません」

私がどこへ行こうが何をしようが毛ほどの興味も示さないでしように。

大方、外出の報せを受けていないのが商人の前でばれ、恥をかいたと怒っているのだ。

どうせプラティーヌ家での私の扱いは、馴染の商人ならほとんど知っている。大事にされていない娘を擁護しても得にならないので、商人達も見て見ぬ振りだ。

母の気が済むまで怒鳴られ、今夜は夕食抜きだと吐き捨てるとうやうく母は出て行った。長かったと嘆息して椅子に座り、机に白紙を置いた。家を出て帝国へ行く決意は変わっていない。フェレ

スと会ったら家を、王国を出て行く。

帝国で流れ者として住むには何が必要だろう。優秀な魔法使いだと判断されれば、向こうでの待遇はよくなるはずだ。

「魔法薬を作るのもありね。作り手が強い魔法使いであるほど、魔法薬の効果も大きく絶大だから、評判もすぐに上がるわ」

狙う客層はもちろん平民だ。貴族御用達は店の評判が上がってからになる。平民でも気軽に買える魔法薬にする、などと何かと紙に綴っていく。

「ポーションとヒーリングサブレは欠かせない。毒と麻痺……なら、解毒剤、重傷なら万能薬を……」

万能薬は複数の毒を食らうか、重傷を負った時にしか使わない。装備として持つなら一般の解毒剤で十分。ポーションとヒーリングサブレは体力回復の薬でポーションは一般的な薬、ヒーリングサブレは妖精が好んで作る薬だ。作り手によって左右される魔法薬だが、私ならどれも高品質のものを作ることができる。

材料が不要で魔法式の理解と知識さえあればできる魔法薬を作るのもよいが、やはり材料を使う魔法薬を錬金術で手ずから作りたい。フェレスと会う前に帝国周辺の薬草の採取地も頭に入れよう。紙に書いていくとやるのが案外多いなと実感し、ペンを置いて腕を伸ばした。

「ふう」

溜め息を吐いてとりとめなく考えていると……

「セラティーナ様」といつの間にかナディアがカットされたオペラと紅茶を運んで来ていた。「すみません、声は掛けたのですが、ご返事が聞こえず心配になって……」

私の許可なく部屋に入ったのを言っているようだ。私は「気にしないで」と微笑み、ナディアが買ったオペラを食べようと机から離れ、ソファアヘ移動した。

「何をしていたのですか？」

「大したことじゃないわ」

「そうですか。お顔色が優れないようですが……」

テーブルに置かれた紅茶とオペラ。

早速頂こうとティーカップを持ち上げた。

夕食は抜きすると母に言われていたので食堂へは行かず、自室で昼の続きを紙に綴る。空腹ではない。その後、料理長が気を利かせてナディアに食事を運ばせてくれた。キャベツとベーコンがたっぷりのコンソメスープと焼きたてのパン、それから分厚いステーキ。こっそり渡すには豪勢ねと苦笑した。

「料理長にお礼を言っておいて」

「きつと喜びます」

「お願いね」

屋敷の中では数少ない、私を気に掛けてくれる人。小さい頃、表立って擁護すれば立場が危うくなるからと自ら伝えてからは、陰から私を支えてくれている。

夕食も食べ終わり、湯浴みもそろそろ支度してもらおう。

「そういえば、フェレスは何をしに王都へ来るのかしら」

基本、引き籠もりで外へは自主的に出ないフェレス。

探し物と言うからには彼にとつてよほど大事なものだろう。欲しいものがあっても使い魔を放つか魔法で取り寄せるくらいなのだから、王都まで来るなんて相当珍しい。

「フェレスが欲しがるもの……」

王都にあるもの限定で……

「……駄目ね。全然わからない」

フェレス限定にせず、魔法使いが欲しがるもので考えてもさっぱりわからない。

当日、聞く機会があれば聞いてみよう。

「貴方に一目会いたいわ、フェレス。ただ……もしも、貴方の側にほかに愛する人がいるなら、それはそれで嬉しい」

一人ではなく誰かと幸せに暮らしていたとしても、嬉しく思う気持ちは本心。

一人でいることに慣れたと言っていたのに、私と共に生活を始めると一人は嫌だとよく言っていた。

根は寂しがりやなフェレス、どうか幸せであるようにと願う。

翌朝。ナディアと朝の身支度をし、食堂へ向かおうとして、足を止めた。

「お嬢様？ どうされました？」

「うーん……」

昨日夕食は抜きだと言われ、ずっと部屋に引き籠もっていたのだ。

両親からありがたくもない説教付きで、きつと普段の二倍増して小言を貰うだろう。そう考えると食堂で食事を摂るのが嫌になる。

「部屋で食べるから、食事を持って来てもらえる？」

「奥様と旦那様が後から何と言うか……」

「私が我儘を言っているって言えば、ナディアは叱られないから大丈夫よ」

「そういう意味ではなくて、セラティーナ様が心配で」

「ありがとう。慣れたから私は平気」

「……わかりました」

万が一の事態になっても私には魔法がある。手を上げられそうになっても防御結界くらいたやすく展開可能だ。

ナディアの背をポンポンと押して食事を取りに行かせ、自身は部屋に戻って食事を待つ。

——トントン。

「うん？」

窓ガラスを叩く小さな音が聞こえた。

窓に近付きカーテンを開けると小鳥が嘴でコツコツと叩いている。

窓を開けると小鳥は私の掌に乗り「ピー、ピーピー」と鳴いた。

「ランス……？」

小鳥は昨日組合で出会ったランスの使い魔らしく、魔法言語の伝言を受け取った。

「ありがとうね」

お礼として私の魔力を分け、小鳥を空へ飛ばした。

ちょうどタイミングよくナディアが食事を運んで来た。

席に座り、テーブルに食事を並べるナディアに両親から何も言われなかったか確認する。

「いえ、私は何も。ただ、セラティーナ様にかなりご立腹で……」

「でしようね」

私が何をしても気に食わないのだ、あの二人は。

「朝食を食べたら出掛けるわ」

「どちらへ行かれますか？」

「昨日と同じ。今日はオペラを買わないから一人で行くわね」

「いけません。私もお供します」

組合に行つて人と会うと言ったら、必ず理由を訊ねられるだろう。上手く誤魔化す方法はないかと、朝食を頂きながら思案する。

魔法で相手の意識を逸らして従わせるのは可能だ。

けれど後から疑問に思われても困るので使わない方向で考えたい。

ナディアに納得してもらう方法はないだろうか。

が、彼女の確固たる意志を秘める表情を見ていると多分無理だろうと諦めた。

「どうにか納得してちょうだいな。危険な場所へは行かないから。屋敷を出て一時間で戻るから、それで許してちょうだい」

「……わかりました」

まだまだ説得しないだろうと構えていたけれど、かなり不服そうだがナディアは納得してくれた。とりあえず安堵してナディアが持つて来た朝食に手を付け始めた。

宣言通り、朝食を食べ終えるとお出掛けの準備をする。

何か言いたげなナディアに苦笑し、お土産を買って渡そうと決めた。ナディアの好物は何だったかと思いつつ、公爵家の誰かと会う前に外へ出る。待機させてあった馬車に乗り込み、御者に昨日と同じ場所へ行つてほしいと頼んだ。

馬車に揺られる間、ランスの寄越した伝言を思い出す。

フェレスが王都に来るのは三日後、だったはずが……急に日程をずらし今日王都に着いたと報告を受けた。驚くことに第二皇女も一緒だそう。

フェレスは第二皇女の護衛として来たらしく、今は城にいるとのこと。予定が前倒しになったのは第二皇女の強い希望で、先日の王太子殿下の誕生日パーティーに出席できなかったのがよほど悲

しかったようで……フェレスに強い治癒魔法を掛けてもらい、強引に治したのだとか。

人間の回復能力は個人によって大きく異なるとはいえ、自然な回復を無理矢理早めれば肉体に負担を掛ける。

皇女がそこまでして治したかったのは、王太子殿下に会いたかったからだろうか。

王太子殿下と第二皇女の関係は良好と聞く。

愛する人に少しでも早く会いたい気持ちは私にもわかる。

もしもシュヴァルツ様を愛していたら、自分はこうしていただろう。前世の記憶を持っているから簡単に好きにはならないとしても、共に時間を過ごす内にひよっとしたら愛していたかもしれない。

「……こればかりはきっと誰にもわからないわ」

私はそっと呟いて、流れる景色を見つめた。

馬車を昨日と同じ場所に停車させて降り、一人組合へと足を運んだ。

昨日の今日なので受付嬢は私の顔を覚えていて、ランスは二階で待っていると案内された。特定の所属者に依頼がある場合は二階の個室で対応をするのだとか。

私は階段を上がつてすぐの部屋に通された。

「お、待ってたぜ」

テーブルと椅子が置いてある質素な部屋にランスはいた。軽く手を挙げて笑っている。

私は会釈をしてランスの向かいに座った。

「ちゃんと報せは届いていたようだな」

「ええ。お礼に私の魔力を分けました」

「知ってるよ。あんた、魔法とは縁がないプラティーヌ家の令嬢にしちゃあ、使い魔への礼儀がなっているな。プラティーヌ家にとつたら、待ち望んだ嬢ちゃんじゃねえのか」

「そうではないですよ」

魔力が高いだけの一族と魔法使い達から嘲笑われてきたからこそ、商売の腕を磨き王国一の財力を誇るようになったプラティーヌ家。

私のように、稀に魔法が得意な者が生まれても親族からは冷遇されるのだ。以前にもいたらしいが、今の私と変わらない扱いを受けたと親類に聞いた。その扱いに耐えられず、その者は家を出て以降一切の連絡を絶つたらしい。

プラティーヌ家では魔法の才能があると、かえって冷遇される運命だと苦笑しながら言うところの顔色が変わった。

「すまねえ……知らなかったとはいえ、無神経なことを言った」

「気にしないでください。貴族のお家事情は組合の人でも把握しきれないでしょう」

「個人で貴族の依頼も多く受けるから、ある程度は知っているさ」

なら、私の婚約者についても知っているのだろうか。興味本位で訊ねると頷かれた。

「お嬢さんが帰った後でちょっと調べさせてもらった。何つうか、健気だな、お前さん。お前さん

の婚約者、聖女様と両想いだって有名なグリージョ家の坊ちゃんなんだってな」

「ええ、まあ」

「妖精の粉を渡したら婚約者の気持ちがお嬢さんに絶対に向く！ とは言えねえが、できる限り協力はするぜ」

「あ、ありがとうございます」

そうだった。フェレスに会いたいもつとらしい理由のために、シュヴァルツ様に妖精の粉を渡したいと言ったのだ。だが今になって軽率だったと後悔した。私が実際にはシュヴァルツ様を愛していないとはいえ、妖精の粉を実際に渡した方が良かったらうか。自分用に少しは欲しいので手に入れたら量を調節しよう。

「使い魔で報せた通り、フェレスは今日来る。先に城へ行って第二皇女を送り届けた後、こつちに來るって話だ」

「そうなのですね」

予想よりもずっと早くフェレスに会える。

もしも、彼の側に自分以外の女性がいれば決して前世の妻だと悟られず、ただの依頼者として終わろう。会いたいと切望していた彼を一目見れば、ずっと見ていたくなるだろう。だが、私は一人で生きていく道を選ぼう。そこに後悔がないようにしたい。

「フェレスが来る間、ここにいるかい？」

「あ……時間があんなら、少し買い物をしたいです」

「じゃあ、来たら使い魔を飛ばすよ」

「ありがとうございます」

一旦個室を退出し、そのまま組合の建物からも出て広場へと向かった。街の広場では馬車の待合で列を成す人々や中央にある噴水は憩いの場となっており、人がたくさんいる。

買い物をしたいのは嘘。フェレスに会う前に緊張を解きたい。

「今の私とは初めましてだから、前世の妻と悟られないようにしないと」

フェレスが現在、どういう状況で暮らしているのかが不明だから、なおさら。

だが、ずっと会いたかった前世の夫に会えるのだ、胸に感じる喜びは偽物じゃない。

「セラティーナ？」

「！」

この声は……と顔だけ振り向くと——やはり、予想通りの相手シュヴァルツ様が怪訝な表情で立っていた。側にルチア様はいない。今日は一人で街にいるのか、珍しい。

「こんなところで何を？」

「あ……買い物をしていて、疲れたので休憩をしよう」と

「……一人で？」

あ……と返事を間違えたと気付いた時には遅かった。侍女も護衛も付けず、一人で街中へ赴くなど貴族の令嬢がする真似じゃない。

「たまには一人で買い物をしたい時もあります」

「供も付けずに？ 危険だ」

「ちゃんと防衛魔法は使えますから、いざという時は自分でどうにかします」

「魔法を使えるからといって、安全とは言い切れない」

こんな風に心配するなんて珍しいと心底不思議になる。

普段のシュヴァルツ様は私に全く興味を示さないのに。

だが、次の言葉で意味を理解する。

「君は私の婚約者なんだ。私の婚約者として相応の振る舞いをしてもらわないと」

「……」

「それに、君が一人で外に出ているのを見られたら、プラティーヌ家は娘に護衛も付けず外に出させる家だとはかの貴族に批判される」

内心溜め息を吐いた。自分の評判のためだったか。

プラティーヌ家の内部に関して言えば、私がすることは大体気に食わないので、何をしても言いがかりを付けられる。

彼の言葉にはあえて食いつかず、逆に質問を投げかけた。

「シュヴァルツ様こそ、お一人で街へは何を？」

「……評判のいいクッキーがあると聞いて……」

——わざわざ一人で？

言いそうになったのをグツと堪え、そうですかと口にした。

彼が一人でクッキーを買いに……言わなくてもわかる、贈る相手はルチア様だ。

グリージョ公爵の許しが出なくても、外出の理由を納得させる方法は幾らでもあるはずだ。

「君に……渡そうと思つて……」

「え？」

聞き間違いでなければ、クッキーを贈る相手を私だと言つた？

「ルチア様に贈るのでは……？」

何度か瞬きを繰り返して無意識にルチア様の名を出してしまった。

気まずげにしていた彼の灰色の瞳が、ルチア様の名が出た途端鋭さが増した。

「……ルチアじゃない。君にだ、セラティーナ」

「……」

今までシュヴァルツ様から貰つた贈り物は、どれも婚約者として最低限の役割を果たす物ばかり。夜会や公式行事で参加するパーティーでは、婚約者の瞳の色をしたドレスや宝石を身に着けるのが常だ。けれど私には、私の瞳の色のドレスか宝石が送られていた。シュヴァルツ様の髪や瞳が灰色だから、灰色が彼の魔力と同じ紫を贈るべきだ。

だが、その色を身に纏^{まと}つているのは常にルチア様だった。彼とルチア様が並ぶと二人こそが婚約者に見える光景を何度も見て来た。

何と言うべきかと迷うが、言葉を発しないと気まずい空気が流れ続ける。

ありきたりに「なぜ私に？」と発するのが精いっぱいだった。

「なぜ？ 婚約者に贈り物をするのは変か？」

「変ではないですけど……シュヴァルツ様が言うとかかなり変になりますね……」

「……」

彼にも自覚はあるのか、再び顔を曇らせて視線を逸らした。

「昨日、ルチア様と逢い引きをなさっていたではありませんか。その次の日に私にクッキーを贈るのは、私がお二人の逢い引きを目撃したからですか？」

「……」

「お気を遣われているなら不要ですよ。お二人のことは、貴方と婚約する前から知っています。シュヴァルツ様がルチア様を愛そうが誰を愛そうが、私には無関係ですから、クッキーは必要ありません」

今なら特にそう思う。

「セラティーナ、君は……」

言葉を途中で切り、声を発しようと口を開いては閉じるを繰り返すシュヴァルツ様。

言いたいことは何でも言う彼が珍しい。今日のシュヴァルツ様は珍しいのオンパレードだと見ていると灰色の瞳と目が合った。

「最初に会った時から、君は寂しそうにしていた」

「？」

一体、何を言われているのかと怪訝に思いながらも口を挟まず話を聞こうとする。

立ち読みサンプル はここまで

だがその時、二人の間に小鳥が飛んで来た。

私の肩に乗った小鳥は、今朝ランスからの報せを届けた小鳥と同じだった。彼の使い魔だ。伝えられた言葉に瞠目し、小鳥にお礼を述べ魔力を分けると空へ飛ばした。

「セラティーナ……？」

呆気に取られるシュヴァルツ様に頭を下げた。

「すみません！ 急用ができたのでこれで失礼します！」

「ま、待つてくれ！ どこへ行くんだ」

「急用なんです！ ごめんなさい！」

「セラティーナ！」

小鳥が報せてくれた。

フェレスが今組合に来ていると。ランスを訪ねて先程までいた個室にいます。

早く会いたくてシュヴァルツ様が呼び止めても振り返らなかった。

急いで組合へ戻り、階段を上がって個室の前に立つ。

深呼吸をして自分を落ち着かせる。

「落ち着け、落ち着くのよ」

フェレスからすれば、私は初めましての相手だ。知っている素振りを出してはいけない。覚悟を決めて拳を作り、扉を叩いた。

勢いよく扉が開く。驚いた私を目の前に現れた相手が抱き締めた。

